

「和訳先渡し授業」による英語授業改善の実践研究

—学習者の情意面に焦点を当てて—

広島県立総合技術高等学校

上西 幸治

1 はじめに

英語力育成をする上で、特にコミュニケーション能力が大きな課題である。これまで様々な実践が行われて成果が上がっていると思われる。私自身、日本語を多用しない授業実践により、学習者のコミュニケーション能力を伸長する実践を試みてきた。英語を通して英語を学習する実践、つまり学習者ができるだけ英語に触れる形での授業実践を試みてきた。しかし、難解なテキスト内容を教える科目に関しては、内容を理解するために日本語訳が授業の中で大きい比重を占める授業展開をせざるを得なくなり、学習者のコミュニケーション能力伸長のための授業展開が妨げられる傾向が出てきた。また、学習者や外国人指導助手からも、その点の不満が出始め、それを払拭する意味で何らかの方策をとる必要性を感じた。

そこで、その打開策の一つとして、注目した実践が「和訳先渡し授業」である。つまり、英語による授業展開を実践する上で「和訳先渡し授業」の導入は十分効果があると考えたのである。これまでの実践報告によれば、全体的にかなりの効果があると思われる。本研究では、「和訳先渡し授業」に関して、具体的に学習者の情意面に焦点を当てた実践・研究を試みた。

2 過去の実践研究

過去、リーディング指導に関して、教科書の英文訳読を中心とした指導を Grammar Translation Method などといわれ、批判をされてきた経緯がある。その脱却を試みた実践の一つが、日本語訳を渡して指導するというものである。その実践成果を発表したものもある（静 1996；小泉 2003 他）。

高校英語教育を変えるために高知県高校授業研究プロジェクト・チームが授業改善に積極的に取り組んだ成果を発表した。それが「和訳先渡し授業」である。従来、英語教師は英文の和訳を伝達・説明することに時間を費やしてきた傾向があった。それを抜本的に見直す取り組みが行われ、その実践内容や成果等が全英連高知大会で発表された。また、その後その先進的な実践内容や成果などを紹介した著書が出版された（金谷他 2004）。まず、その具体的な実践目的について記述する。和訳先渡しの目的は、大きく次の2点であると述べている（金谷他 2004: 30-31）。

- (1) 高校では読む量が大切であり、その量を定着させる。
- (2) 余剰時間で英語の定着及び発信を図る様々な活動を行う。

更に、この方法の成果、特に学習者がその授業をよいと感じた項目を挙げると次の通りである。

- (1) 内容が分かりやすい。

- (2) 英文と和訳を対照させて違いを理解できる。
- (3) 文法や語彙を理解しやすい。
- (4) 授業が分かりやすくなった。
- (5) 自学自習に役立つ。
- (6) 効率がよい。楽である。
- (7) 意欲が高まる。
- (8) 力がつく。

また、上記の実践では、英語力の観点から見ても、学習者の英語力がより向上し、語彙力も「和訳先渡し授業」をしないクラスに比べて、より伸びているデータ結果が出ている。

3 研究目的・方法

3. 1 研究目的

英語力養成のための試みとして、まず「和訳先渡し授業」に対する意識に焦点を当て、次に学習者の情意的視点と科目の中心的位置を占めるプレゼンテーション評価との関連性に焦点を当てた。研究目的としては、以下の4点が挙げられる。

- (1) 「外国事情」という科目の中で、学習者は全体的に「和訳先渡し授業」をどのように捉えているか。
- (2) 全体的な授業内容に対する意識と各活動内での意識との関連性はどの程度あるのか。
- (3) 自由記述（質的分析）により、学習者が全般的に「和訳先渡し授業」をどのように捉えているか。
- (4) 個人プレゼンテーション結果と「和訳先渡し授業」の学習活動に対する学習者の情意面との関連性はどの程度あるのか。

3. 2 研究方法

上記の目的を考慮し、日本語訳を先に渡ししながら授業を実施した。調査参加者数は最終的に30名であった。約4ヶ月間授業実施した後、アンケート（Appendix 1）を実施し、学習者が「和訳先渡し授業」についてどのように考えているか、学習者の情意的側面に関するデータをとった。

まず、その学習者の情意的側面について、全体と各活動との意識の関連性を探るために、ピアソンの相関係数を用いてデータ分析を行った（4 結果と考察、参照）。次に、プレゼンテーションの評価結果と授業後の情意的側面とのデータ比較を行った。

3. 3 実践内容

「外国事情」という科目は、学習者が世界の時事問題について包括的に知識を得て、その諸問題の中からテーマを絞り、英語でプレゼンテーションをするというものである。その際、学習者が包括的にしかも世界の諸問題を系統立てて学習できる教材 *The Real World Today* を選んだ。かなりハイレベルのテキストであるが、そのテキストを使用することで、学習者に世界の出来事や時事問題について包括的に理解し、自らの考えを述べさせるプレゼンテーション知識の基礎作りを目指した。

3. 3. 1 授業内容

受容能力ばかりでなく発信能力の伸長も念頭に置いた授業を展開するために、和訳中心でない形での授業実践を試みた。主な具体的活動内容について記述すると、以下の通りである。

(1) 暗記テスト

テスト用紙を配布し語彙の意味あるいは英単語を記入させる。そのあと解答を確認し、

誤答箇所の暗記を求める。そののち、英単語を使用しクイズ形式で教師と生徒のインタラクションをする。

(2) 語彙定義

教師が単語の定義を英語で説明し、生徒は該当する単語を考えて答える。

(3) 和訳使用

和訳を渡して英文内容を理解させる。語彙の意味の確認と発音指導も行う。

(4) パラグラフ

各パラグラフの要点となる重要な英文を考え下線を引かせる。クラスの中で重要英文の確認をする。

(5) 質問

パラグラフごとに内容に関する英問英答を行う。

(6) 音読

各パラグラフの重要英文の音読を行う。シャドウイング、オーバーラッピングなどの活動をペアワークやクラスのグループなどを利用して行う。

(7) ディスカッション

英文内容を理解した上で、教師が生徒に問題を提示し考えさせる。それについて意見を求める。更に教師がコメントをし、他の生徒の意見も求める。英語によるインタラクションを通して、自分の意見をまとめ英語で伝える訓練をする。

3. 3. 2 プレゼンテーション実践

毎年「外国事情」の中で、年に2回のプレゼンテーション（グループと個人）を実施する。グループ・プレゼンテーションにおいて、プレゼンテーションの基礎作りをして、個人プレゼンテーションの準備をする意味合いもある。世界の諸問題（人権・平和・環境・民族等）の中から、各自が自らのテーマを決定し、そのテーマに沿って、現状把握・課題に関する情報収集をし、解決法等について思索し、英語でプレゼンテーションを行うものである（e.g. Uenishi 2003, 2004）。世界の諸問題を学習する際に、テキストを使用しながら「訳先渡し授業」を展開した。プレゼンテーション時間は3分間程度で、その後発表内容に関してQ&Aがある。評価項目は、暗記・内容・英語・姿勢・視覚利用・Q&Aである。

4 結果と考察

実質的に「和訳先渡し授業」を終えた1月末に実施したアンケートを集計・分析した結果を研究目的別に見ると以下の通りである。

4. 1 研究目的（1）

まず、(1)『外国事情』という科目の中で、学習者は全体的に『和訳先渡し授業』をどのように捉えているかに関して、学習者の授業に対する意識は以下の通りであった（図1）。

全体的に見て、学習者は「和訳先渡し授業」を肯定的に捉えている結果が出た。つまり、以前の内容理解や要約等に時間をかけた方法に比べて、学習者にとって有効な方法であったと感じているようだ。項目別に見ると、「和訳先渡しの方がよりよい授業であった」という項目に関しては、ほぼ全員の学習者が肯定的な意識を持っている。この点だけを見ても、授業改善の意味は十分にあったといえる。90%を超える学習者が肯定的な意識を持った項目としては、「学習意欲が高まった」、「内容理解がよりできた」が列挙される。英語の学習意欲が高まり、内容がより理解できた、ということは、授業の重要な中身に関して、その意味を十分に果たしているといえる。その他の点においても、肯定的な反応が多かった。例えば、「読解

力がついた」「英語学習が楽しかった」という項目に関しては、70%を超える学習者が肯定的に答えている。

図 1 学習者の授業意識

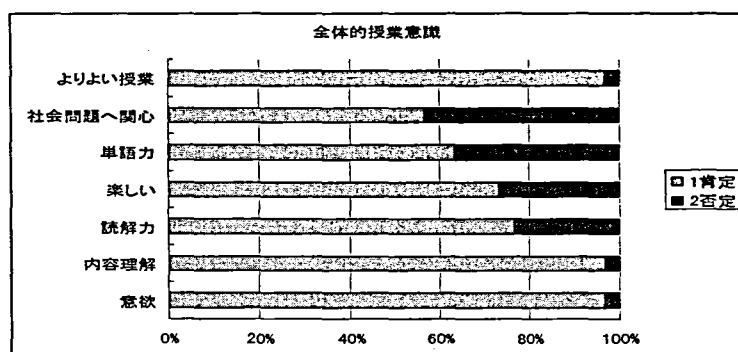


表 1 学習者の授業意識 (χ^2 検定)

	C	S	V	P	R	U	MO
χ^2	26.133	.533	2.133	6.533	8.533	26.133	26.133
df	1	1	1	1	1	1	1
p	.000	.465	.144	.011	.003	.000	.000

Notes: C: よりよい授業; S: 社会問題への関心; V: 語彙力の伸長;

P: 楽しさ; R: 読解力; U: 内容理解への深まり; MO: 動機付け

次に、この数値が統計的に意味を成すかどうかをノンパラメトリック検定のカイ 2 乗検定で検証した (表 1)。その結果、「以前の授業よりよかった」「学習意欲が高まった」「内容理解が深まった」「読解力がついた」の 4 項目は 1%水準で有意差が出ており、「英語学習は楽しかった」という項目に関しては、5%水準で有意差のあるデータ結果が出た。この結果は、これらの項目が統計上十分意味があるということを示している。一方、「社会問題への関心が高まった」「単語力がよりついた」に関しては、5%水準で有意差は出なかった。

この結果、学習者の情意的側面から「和訳先渡し授業」を見たとき、学習者の意識に関して次のことがいえる。

- ・全般的に以前実施していた内容理解や要約中心の授業よりもよい授業であった。
- ・この授業を通して学習意欲が高まった。
- ・英語学習が楽しく、内容が理解でき読解力がついた。

次に、実施した各活動が「英語力向上に役に立ったか」についての意識を検討する。「英語力向上に役立つ」という視点から、各活動を比較してみると以下の通りである。90%を超える学習者が肯定的な意識を持った活動項目としては、「質問 (ALT's Questions)」, 「語彙定義 (Word Hunt)」が挙げられる。リスニングとその反応を織り交ぜながらのインタラクシヨンの度合いが高い項目であるがゆえ、大半の学習者が英語力向上に有用であるという意識をもったのであろう。

この数値が統計的に意味を成すかどうかをカイ 2 乗検定で検証してみると、各項目の中で

は、「質問」「語彙定義」「(語彙) 暗記テスト」が、それぞれ 1%水準で有意差が出て、これらの活動が統計的に意味を成すことを示している (表 2)。つまり、先ほど記述したように、学習者の英語力を向上させる上で、これらの活動は有用であると学習者自身が意識していることになる。

図 2 英語力向上の有効性

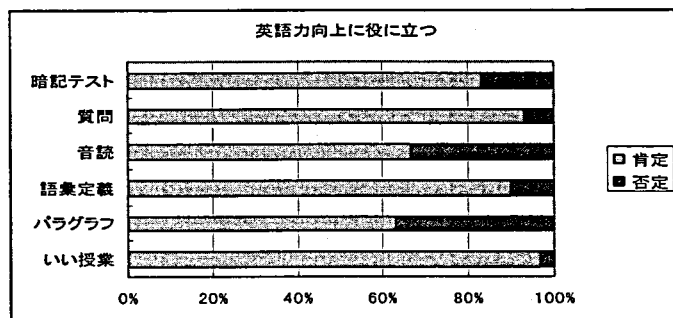


表 2 授業効果に対する意識 (χ^2 検定)

	M	Q	R	D	P	C
χ^2	13.333	22.533	3.333	19.200	2.133	22.533
df	1	1	1	1	1	1
p	.000	.000	.068	.000	.144	.000

Notes: M: 暗記テスト; Q: 質問; R: 音読;

D: 語彙定義; P: パラグラフ; C: よりよい授業

4. 2 研究目的 (2)

次に、(2)「全体的な授業内容に対する意識と各活動内での意識との関連性はどの程度あるのか」について検討する。つまり、研究目的 (1) で取り上げた項目のうち、1%水準で有意差の出た項目 (「意欲」「内容理解」「読解力」) に関して、各活動項目との相関関係を調べ分析した (表 3-5)。その結果、以下のことが分かった。

図 3 英語学習意欲

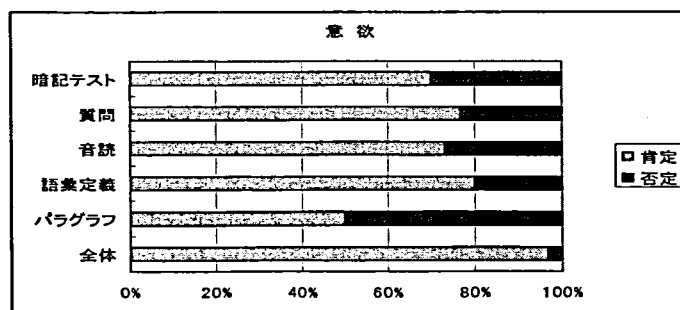


表 3 学習意欲 (ピアソンの相関係数)

項目	<i>n</i>	<i>r</i>	<i>t</i>
暗記テスト	30	.087	.463
質 問	30	.647	4.489**
音 読	30	.511	3.152**
語彙定義	30	.462	2.756*
パラグラフ	30	.384	2.200*

* $p < .05$; ** $p < .01$

全体的意欲の向上と相関関係がある項目は、「質問」「音読」「語彙定義」における同項目であった(表3)。特に、「質問」「語彙定義」は、外国人指導助手とのインタラクションによる活動であり、そのやりとりなどが全体的な意欲との関連性の強さに繋がっていることも考えられる。逆に、「(語彙の)暗記テスト」などは全体的な意欲との相関はなく、学習意欲の有無とそれらの項目に対する意識とは関係がないようだ。

図 4 英文内容理解

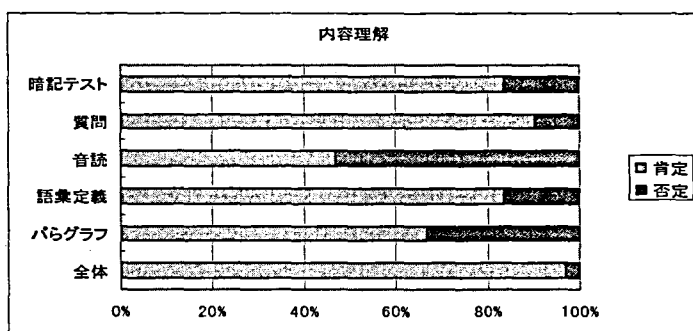


表 4 英文内容理解 (ピアソンの相関係数)

項目	<i>n</i>	<i>r</i>	<i>t</i>
暗記テスト	30	.445	2.630*
質 問	30	.651	4.541**
音 読	30	.366	2.086*
語彙定義	30	.438	2.579*
パラグラフ	30	.329	1.846

* $p < .05$; ** $p < .01$

次に、「内容理解」(全体)と各活動内の「内容理解」との相関を見ると、相関係数が高いのは「質問」との関係($r = .651$)である。他にも「語彙定義」「暗記テスト」も相関がある数値が出ている(表4)。内容理解が深まったと思っている学習者が、質問・語彙定義などの学習に対して肯定的な印象を抱いている傾向が窺える。

「読解力」(全体)との相関に関しては、「パラグラフ」「質問」「語彙定義」における同項目がそれぞれ .548, .455, .437 で相関がある結果が出ている(表 5)。これらの項目は、どれも英文内容の理解を深め、インタラクションをする活動であるので、読解力との関わりが大きいと考えられる。

図 5 英文読解力

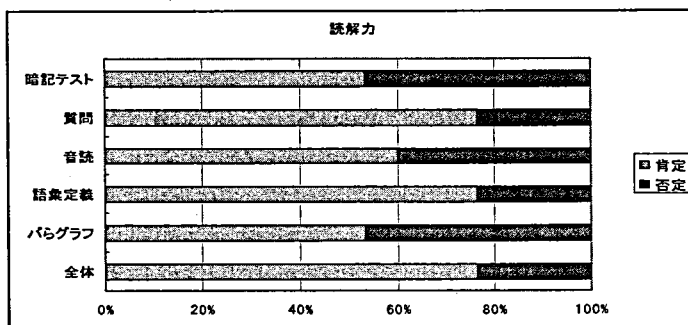


表 5 英文読解力 (ピアソンの相関係数)

項目	<i>n</i>	<i>r</i>	<i>t</i>
暗記テスト	30	.107	.569
質問	30	.455	2.704*
音読	30	.169	.912
語彙定義	30	.437	2.577*
パラグラフ	30	.548	3.475**

* $p < .05$; ** $p < .01$

4. 3 研究目的 (3) (質的分析)

アンケートの中で、「和訳先渡し授業」について自由に記述をしてもらった。一つの質問項目「全般的に「和訳先渡し授業」は以前の授業よりよかった(よくなかった)」理由に関して、次のような記述が見られた。

まず、「内容が理解しやすい」「内容が早めに把握できた」など、「内容理解」に関する肯定的な意見が 30 人中 14 人、約半数の学習者がよい印象を抱いていた。また、「単語力がつく」(2 人)、「自学自習ができる」「授業が取り組みやすい」などの記述も見られた。半数近くの学習者が内容理解に触れているのは、以前の方法では全体を把握するのに時間がかかり、内容が把握しきれなかった現状があったように推察する。和訳を先渡しすることで、その点を克服できたのであろう。

もう一つの項目「和訳先渡し授業について自由な感想」に関して、上記と同様な内容理解に関わる記述が多かった。具体的には、「英文の内容がよく理解(把握)できた」(10 人)、「授業が(スムーズで)楽しい」(4 人)、「授業への意欲が増した」(2 人)という記述が見られた。この授業の感想に関しても、3 人に 1 人が「内容をよく理解できた」と記述していることから、内容理解面において、日本語訳を先に渡して授業展開をしていくのは意義深いと推察される。更に、「授業が楽しい」「授業意欲が増した」についても数人の学習者が記述

している点も注目する必要があるであろう。

その反面、この授業に対する否定的な記述も見られた。具体的には、「英語をきちんと読んでいない気がした」(2人)、「単語力が落ちた気がする」(1人)、「訳に頼って辞書を引かなくなった」(1人)などが挙げられる。これらの点に関して述べると、以前の学習方法に慣れていたせいで、「和訳先渡し授業」へ順応しにくかった学習者がいたことが推察される。学習者の否定的な思いを払拭する的確なアドバイス等をしながら、学習不安を取り除いて授業に取り組ませる教師自身の手腕が問われる気がする。

4. 4 研究目的 (4)

(4)「個人プレゼンテーション結果と「和訳先渡し授業」の学習活動(総計)に対する学習者の情意面との関連性はどの程度あるのか」について検討してみよう。個人プレゼンテーションを実施し、その際に評価した結果(25人)を各学習活動に対する意識の総計と比較した。

その結果、プレゼンテーション結果と相関(1%水準で有意差)があるのは、「パラグラフ」「語彙定義」「質問」「暗記テスト」の4活動が、それぞれ .648, .747, .673, .618 であった(表6)。特に、プレゼンテーション評価結果と強い相関のあった活動は、「語彙定義」であった。英語使用を中心に据えた授業展開の中で、ゲーム的要素を取り入れたこの活動は、リスニング力、語彙力、積極性等が要求され、スピーディな活動だったのでこのような結果が出たのかもしれない。プレゼンテーション評価結果と授業の多くの学習活動に相関があったことは、プレゼンテーション結果がよい学習者が、それらの項目に関して高い肯定的意識を持っている傾向があることを示している。

表 6 プレゼンテーションと諸活動の相関

項目	<i>n</i>	<i>r</i>	<i>t</i>
パラグラフ	25	.648	4.048**
語彙定義	25	.747	5.395**
音 読	25	.328	1.668
英問英答	25	.673	4.364**
暗 記	25	.618	3.766**

* $p < .05$; ** $p < .01$

5 まとめ

学習者の授業に対する意識の変革及び授業改善を目指して「和訳先渡し授業」を試みた。学習者はこの授業をとっても肯定的に捉えていることが明らかになったといえる。この授業は、学習者とのインタラクションを中心に据えた活動を随所に入れながら、英語学習意欲を高めるもので、実践する意義が十分にあると考える。金谷他(2004)で述べられているように、「和訳先渡し授業」を通して、学習者が「内容を理解しやすい」「意欲が高まる」「英語力がつく」という意識をもつことを再認識した。しかも、余剰時間での様々な活動も可能であり、学習者の意識結果から見ると、その意義も十分あったと考える。

その一方で、本研究の課題も表出している。一つは、質的な分析(自由記述)の中で、単語力や学習に対する意識において否定的な意見が少数ながら出ていたことである。以前

の授業形態に慣れていた学習者に、多少なりとも学習不安を引き起こしている面を窺わせる。教師自身が、常に目の前の学習者の実態や意識を敏感に捉え、的確なアドバイスをして彼らの不安を払拭する必要があるとあらためて感じた。2 つ目に、研究対象者が少ないことである。対象者をもっと多くし、信頼性の高い研究にすべきである。3 つ目に、実際の英語力について、今後検討が必要である。学習者の意識は、確かに肯定的な反応が多く、意義深い実践研究であったと感じる。しかし、英語学力が伸長しているのかどうかに関して、今後調査・分析が必要である。

最後に、授業改善のために和訳を先渡ししたのであるが、どんな授業改善であれ、まず教師が実態を把握し授業内容を自己点検した上で、学習者のためのよりよい授業実践を展開する必要があると考える。今後もよりよい授業を目指して、英語学習者のために実践・研究を推進していきたい。

参考文献

- 金谷 憲・高知県高校授業研究プロジェクト・チーム(2004).『和訳先渡し授業の試み』三省堂.
小泉玲子(2003).「アクション・リサーチ リーディング能力の向上を目指して」『アクション・リサーチ研究 (創刊号)』アクションリサーチの会@yokohama.
静 哲人(1996).「バイリンガル・フォーマット もう辞書はいらない？」第 22 回全国英語教育学会仙台研究大会発表資料.
Uenishi, K. (2003). A Research of Students' Oral Presentation in World Studies: Focusing on Assessment 広島県立安芸府中高等学校研究紀要『公孫樹』第 19 号 pp.107-117.
Uenishi, K. (2004). A Study of Students' Oral Presentation in International Course: With a Focus on Teachers' Assessment『関西学院大学教職教育研究』第 9 号 pp.81-86.

Appendix 1

外国事情アンケート

外国事情の科目を終えるにあたり、今後の科目指導の参考のためにアンケートをします。率直に教えてください。項目は、和訳先渡し授業とプレゼンテーションの 2 点です。答え方は、6 (とてもそうだ)、5 (そうだ)、4 (ややそうだ)、3 (ややそうでない)、2 (そうでない)、1 (とてもそうでない) です。

I 和訳先渡し授業に関して

- 1 和訳先渡し授業で、英語学習の意欲が高まった。
- 2 和訳先渡し授業で、学習内容がより理解できた。
- 3 和訳先渡し授業で、英語の読解力がついた。
- 4 和訳先渡し授業による英語学習は楽しかった。
- 5 和訳先渡し授業を始めて、単語力がよりついた。
- 6 和訳先渡し授業により、社会問題への関心が高まった。

- 7 訳先渡し授業は、全般的に以前の授業よりよかった。
また、どんな点がよかった（よくなかった）ですか。自由に書いてください。

8-12 パラグラフ毎の要約穴埋め英文、語（句）の定義（Word hunt）、音読、英語の質問、語彙の暗記テストについて、活動別に以下の質問に答えさせた。

- ①楽しい活動だった
- ②英語学習の意欲が高まった
- ③英語読解力がついた
- ④難しかった
- ⑤内容理解が深まった
- ⑥英語力をつけるのに役立った

13 他に和訳先渡し授業について自由に感想を書いてください。

II 英語のプレゼンテーションに関して

- 1 英語プレゼンテーションはよかった。
- 2 英語プレゼンテーションは楽しかった。
- 3 英語プレゼンテーションは英文作成が大変だった。
- 4 英語プレゼンテーションは英文暗記が大変だった。
- 5 英語プレゼンテーションは将来役立つものだと思う。
- 6 英語プレゼンテーションの視覚的なもの（模造紙など）を作成するのが楽しかった。
- 7 英語プレゼンテーションに関して自由に感想を書いてください。